慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 都市フロンティアとしてのバンコク |
| Sub Title | Bangkok as a frontier |
| Author | 坪内, 良博(Tsubouchi, Yoshihiro) |
| Publisher | 慶應義塾経済学会 |
| Publication year | 2002 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.95, No.2 (2002. 7) ,p.207(17)- 220(30) |
| JaLC DOI | 10.14991/001.20020701-0017 |
| Abstract | 大都市の伝統を欠く東南アジアにおいて、19 世紀中葉以後に発達してきた都市が、人口という側面から見てどのような意味でフロンティアであったかを論じた。ここでは植民地に形成された都市ではなく、独立国の首都として発展したバンコクを取り上げ、1883 年に作成された『バンコク郵便職員のための市内住民リスト』を利用して、その小規模性、農業空間との連続性、新開他における民族混住性などを指摘した。<br>The city of Bangkok was a sort of frontier in Thailand, where the tradition of metropolis or a large population cluster had been lacking and has been developing after the middle of 19th century.<br>Details of the residents appeared in the Bangkok Postal Roll published in 1883 were analyzed to highlight the smallness of the core population of this indigenous capital city, continuity with agricultural sphere through canals, and mixed ethnicity in the newly developed streets. |
| Notes | 小特集：フロンティアの比較研究 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20020701-0017 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 都市フロンティアとしてのバンコク

The Frontier in Comparative Perspective
Bangkok as a Frontier

坪内 良博(Yoshihiro Tsubouchi)

大都市の伝統を欠く東南アジアにおいて、19 世紀中葉以後に発達してきた都市が、人口という側面から見てどのような意味でフロンティアであったかを論じた。ここでは植民地に形成された都市ではなく、独立国の首都として発展したバンコクを取り上げ、1883 年に作成された『バンコク郵便職員のための市内住民リスト』を利用して、その小規模性、農業空間との連続性、新開他における民族混住性などを指摘した。

Abstract
The city of Bangkok was a sort of frontier in Thailand, where the tradition of metropolis or a large population cluster had been lacking and has been developing after the middle of 19th century. Details of the residents appeared in the Bangkok Postal Roll published in 1883 were analyzed to highlight the smallness of the core population of this indigenous capital city, continuity with agricultural sphere through canals, and mixed ethnicity in the newly developed streets.

「三田学会雑誌」95巻2号（2002年7月）

# 都市フロンティアとしてのバンコク

坪　内　良　博

**要　　旨**

大都市の伝統を欠く東南アジアにおいて，19世紀中葉以後に発達してきた都市が，人口という側面から見てどのような意味でフロンティアであったかを論じた。ここでは植民地に形成された都市ではなく，独立国の首都として発展したバンコクを取りあげ，1883年に作成された『バンコク郵便職員のための市内住民リスト』を利用して，その小規模性，農業空間との連続性，新開地における民族混住性などを指摘した。

**キーワード**

東南アジア都市，バンコク，フロンティア，民族混住，華人

## 1．はじめに

東南アジア社会の形成にとって，フロンティアの果たした役割は大きかった。東南アジアにおけるフロンティアとしては一義的には採取空間あるいは農業空間が想定されている。東南アジアを挟む中国とインドの巨大人口空間に対する東南アジア自体の小人口空間としての性格が，フロンティアの性格を浮び上がらせるのである。小人口状況という認識は相対的なものに過ぎない。人類史上から見れば，一握りの人類が世界の諸地域に拡散していく過程で絶えずフロンティアに遭遇してきたのである。フロンティアは絶えず定住地へと転換され，フロンティアは移動し続けた。ごく近い過去あるいは現在に至るまで東南アジアにフロンティアが存在し続けたのは，この地域の開発が他の地域に比して若干遅れたという理由による。本論で取り上げるのはこのような未利用の開拓地としてのフロンティアではない。同じ東南アジアにありながら既に確立したバンコクという都市をフロンティアとしての視点から扱おうとしている。都市を異なった文化の遭遇する場所として捉え，それらの融合ないし対立の場として把捉することは，都市をフロンティアとして捉える一つの見方を提供する。ここではこのような文化的な視点が作動する前の，人口空間としてのフロンティアの姿をバンコクに求めてみたいのである。

バンコクは，1782年にラーマ一世によって，チャオプラヤー川の左岸を中心として建設されたタ

イ王国の首都である。バンコクの前史は，ビルマ軍による王都アユタヤの陥落に伴い，現在のバンコク対岸にタクシン王によって建設されたトンブリ王都に遡る。タクシン王はトンブリに宮殿を設けたが，対岸の一部も城壁の中に取り込んだといわれる。このような都市が周辺に拡大しようとするとき，都市対非都市という意味でそこにフロンティアが成立すると考えることができる。この考え方はすべての都市に該当するから，すべての拡大する都市はフロンティアを持つということになる。この現象は単なる都市化として認識されることもありうる。バンコクの拡大が単なる都市化なのかという点も本論の検討事項の一つとなる。

都市という属性があってそれが周辺に拡大していくという過程を考えるのが一つのやり方である。そこでは同質的な「都市」が面的な拡大を実現するという暗黙の前提がある。このことは都市という境界を明示することによって容易に理解される。行政的な線引きによって都市の拡大が確認される場合である。じっさいには都市が行政的な境界を越えて拡張を続ける場合がある。都市のフロンティアをこれらの部分に見出すという方法もある。 この場合もまた同質的な都市の拡大が前提とされている。ここで同質的というのは，非都市的部分すなわち農村的部分と対立的という意味であって，拡大してくる都市が全体として均質的であるという意味ではない。

都市の拡大部分がどのような特質を持つかは興味深い問題である。この地域の居住者の背景を観察することも興味深い。彼らが従来の都市部からの移住者なのか，あるいは新たに流入した者なのか，後者の場合にはどこからやってきたのか。ひるがえって，都市の中心部の住民は定住的なのか。都市中心部にも絶えず人口の流入と住民の入れ替わりがあるのか，等々。フロンティアとしての都市は，それを人口現象として捉える限り，定住的な側面以外に着目して議論されるべきであろう。この意味では，人口増加あるいは面的拡大が認められなくても，都市をフロンティアとして位置づける場合が生じうる。それは，ヨーロッパなどで都市がその高い死亡率と流入率に着目して人口の吸い込み口であると表現されたような状況を含むであろう。

本論では19世紀中葉のバンコクを取り上げて，そこに見られる人口的なフロンティアの諸相を観察してみたい。

## 2．小都市としてのバンコク

19世紀中葉以前のバンコク人口に関する情報は少なく，また信頼性にかけている。ターヴィエル（Terviel 1989）は，19世紀初頭および中葉における，外国人の推定したバンコク人口を手際よく整理している。彼が最初に検討した五つの数値を引用すると表１のようになる。マロック（Malloch）の数値を除けば，バンコク人口として35万人ないし50万人が提示されている。マロックの133,940人という数値もそれが成人男子の数であるという解釈から，ターヴィエルはその意味するところは30万人ないし40万人の人口であると解釈している。重要なことは，彼がこれらの数値に疑

**表1　19世紀初頭ないし中頃のバンコク人口**

| | Malloch 1827 | Schuurman 1828 | Dean 1835 | Neale 1840 | Pallegoix 1854 |
|---|---|---|---|---|---|
| シャム人 | 48,090 | 8,000 | 100,000 | 240,000 | 120,000 |
| 華人 | 60,700 | 310,000 | 400,000 | 70,000 | 200,000 |
| 華人の孫 | — | 50,000 | — | — | — |
| モン人 | 15,000 | 5,000 | — | — | 15,000 |
| ラオ人 | 3,500 | 7,000 | — | — | 25,000 |
| ラオ人（新来者） | — | 9,000 | — | — | — |
| カンボジア人 | 1,000 | 2,500 | — | — | 10,000 |
| タボイ人 | 700 | 3,000 | — | — | — |
| コーチシナ人 | 500 | 1,000 | — | — | 12,000 |
| マレー人 | 2,000 | 3,000 | 4,000 | — | 15,000 |
| ビルマ人 | — | 2,000 | 1,000 | 20,000 | 3,000 |
| ムーア人 | 1,500 | — | — | 20,000 | — |
| "Calies" | — | 200 | — | — | — |
| キリスト教徒 | 950 | 800 | — | — | 4,000 |
| Total | 133,940 | 410,000 | 505,000 | 350,000 | 404,000 |

Terviel (1989), p.226 による（数値は原文のまま）

問を表明してバンコクの人口を10万人のレベルで捉えようとしていることである。

30万人あるいは40万人規模と推定された人口を10万人程度まで縮小しようとする論理には興味深いものがある。ここでは比較的早い時期に現れたスキナー（Skinner 1957）によるものを紹介しよう。スキナーが修正の対象としたのはトムリン（Tomlin 1844）が公表したものだが，もともとシューマン（Schuurmann）による1828年の数値であるという。スキナーはバンコクにおける華人310,000人という数字に疑問を抱き，それが一桁間違って記載されたものだと推定する。実際，それよりやや早い1821年にバンコクを訪問したクローファードは当時のバンコクの華人納税者を31,000人と見積もっているという（Crawfurd 1830）。

クローファードの示した数値は31,500人で，一桁の誤りがあれば315,000人と書かれているはずだというのがこれに対するターヴィエルのコメントで，ターヴィエルは31万人という数字がタイ国全体における華人の数であるという1837年のマルコムの見解（Malcom 1839）に賛意を表している。このことを受け入れると，結局バンコクにおける華人の人口は何かという元の問いに帰り，ターヴィエルはシューマンが華人および彼らの子孫に当てた360,000人に上述のクローファードの数値を代替して，73,000人というバンコク人口を提示するのである。この数値が，納税者という捉え方からしても華人の最小見積もりを示すことは容易に理解できよう。このように，ターヴィエルは極めて順当な手続きを展開しながらも結局，もっともらしいバンコク人口を提示するにいたっていない。そして，彼は，最後のよすがとして1882年における120,000人というスターンスタインの数値

(Sternstein 1980) を引用する。スターンスタインの数値は，郵便住所録（postal roll）という資料に依拠したもので，郵便住所録が各世帯の世帯員数を記録していると思わせるような記述を含みつつも，実際の集計手続きを明らかにしていない。

## 3．バンコク郵便住所録

要するに当時のバンコクは比較的小規模の都市であったらしい。本論では，上に述べた郵便住所録を利用して当時のバンコクの様相を描き出すことを試みる。ここで郵便住所録というのは，タイ国における郵便制度の導入に際して，市域内の各家屋の「家屋番号」を定め各戸に表示させるとともに，これを整理して郵便配達夫の手引きとなる詳細な家屋名簿を作成して印刷した『バンコク郵便局職員のための市内住民リスト』(1883) を指す。この家屋台帳は，四部に分けられ，第一部は王族と官吏，第二部は道路別，第三部は集落別，第四部は水路および運河別の記載が行われている。いずれの場合にも家屋群ごとに，各戸について，(1) 家屋番号，(2) 戸主の名，(3) 官職名あるいは職業，(4) 各戸主が所属するムーン・ナイ（主人）の名，および父または母の名，(5) 家屋の形状などが記されており，19世紀末のバンコク住民の居住状況を知るために，限られてはいるが有用な情報が含まれている。ただし，これらの冊子に記載された各戸の情報の中には世帯構成員に関する如何なる情報も含まれていない。筆者は，以前にこの資料を利用して2篇の論考を書いているが (坪内・石井1982，Tsubouchi 1984)，さまざまな事情のためこの作業は未完に終わっていた。1998年6月から日本学術振興会の共同研究プロジェクトによって1年半の予定で来日したタイ国の社会経済史研究者ポーパント・ウーヤノン（Porphant Ouyyanont）とともに再びこの資料に関する分析を行った。分析は途中の休止を経て現在もなお継続中で，第1次のデータベースを作成したものの未確定の数値をなお含んでいる。本論では後に修正が必要となることを認めつつ，これまでの経過を概括するとともに，分析の方向および見通しについて述べることにしたい。

郵便住所録に関する筆者らの1980年代における分析は，その第1巻から第3巻までを対象として，家屋群ごとの検討を行ったものである。第1巻は他の巻との間に重複が認められるので実際には分析の対象から省いている。つまりこれまでの分析は第2巻と第3巻を対象としたものであった。バンコクの国立古文書館に1巻から3巻までが保管されており，そのマイクロコピーを入手した際これら以外には資料が残っていないと考えたことに起因する。今回の分析では，その後その存在が確認された第4巻をも対象に加えている。既に述べたように，第4巻においては水路や運河沿いの家屋が記載されており，農業従事者を多数含んでいる。郵便住所録に記載された者がすべてバンコクの居住者であると理解するならば，バンコクの広がりは相当なものになり，また，それは都市の行政や商業にかかわる空間のみならず，周辺の農業空間をも視野に入れたものとなる。

第1巻を除くそれぞれの巻に記載された家屋数は，第2巻7,790戸，第3巻9,461戸，第4巻

14,905戸である。また，有人家屋数は，第2巻7,381戸，第3巻9,099戸，第4巻14,821戸である。[1]

第2巻から第4巻までの有人家屋の合計は31,301戸である。当時戸主が1戸の家屋に1人で住んでいたとは考えられないが，それでは1戸に平均何人が居住していたかとなると推定の基礎となる数値がまるで欠如している。19世紀の人口推計においてしばしば用いられる1世帯平均5人をここに適用すると，156,505人ということになる。第2巻から第4巻までの総家屋数は32,156戸でこれに1戸あたり5人を適用すると，160,780人の人口を得る。この数値はスターンスタインの示す首都（Krung Thep）の人口169,300人にかなり近い。

貴族の居宅や寺院などにはかなり大勢の人数が住むこと，移民労働者などが集居する場合がありうることなどを考慮すると，これらの扱いに関する斟酌が必要である。今日のバンコクにおいてもしばしば見られるように，親子，きょうだいなどが同一の屋敷地に居住する場合，これらの代表者が記載されたのかあるいは家屋ごとの記載が行われたのかも問題である。借家あるいは長屋が記載され，その中に空家であることを明示する記述があるところからみれば，建物ごとの把握が比較的正確に行われたと判断することができるが，それは市街地，あるいは計画された居住地についていえることで，一時的居住者を含む仮小屋地区や周辺部ではどの程度正確に把握されたか不明である。第1巻が他の巻との重複部分を含むにせよ，そこだけに記録された居住単位固有の住民人口を如何に評価するかも問題として残る。このように考えると上述の人口の数値はあくまでもおおよその推定値に過ぎない。膨張しつつある都市のセンサスはしばしば不完全なものとなるが，この点については，当時のバンコクの人口規模がさほど大きくなかったことが比較的正確な把握を可能にしているともいえる。

## 4．民族別居住者

郵便住所録において，世帯主あるいは居住者の民族所属は必ずしも明確に示されているわけではない。それらは，戸主の名前に付されたタイトルから判別することができるに過ぎない。ちなみに，

---

（1） 第2巻と第3巻の有人家屋数の合計は16,480戸であるが，この数値は筆者らが1982年に同じ資料を使って報告した16,565戸よりも85戸少ない。家屋の中には寺院その他公共の目的で立てられたものや居住者を欠くものが相当あるが，その扱いが前回と今回とでは異なっていることがこの相違の原因の一つかもしれない。前回の手集計という方法もいくらか誤差を生み出しているかもしれない。資料は，前回も今回もマイクロフィルムの紙焼きを使用したが，前回使用したマイクロフィルムと今回使用したものとは入手経路を別にしている。大量の資料をマイクロフィルム撮影する際に生じた脱漏，紙焼きの際における脱漏などがいずれかあるいは双方において生じている可能性も否定できない。この種の齟齬は，資料評価を厳密に行うことが少ない統計処理を中心にする研究方法をとった場合に現れやすい。また，資料処理に際して雇用労働を使用した場合予期せぬミスが生じることもある。前回の分析に際して作成したカードは，大部分そのまま保管されているので，互いに照合する機会は残されているが，ここでは照合作業を将来に残して論を進めることにする。

タイ人平民男子に対しては *naai*，華人に対しては *ciin* というタイトルが付されている。各種の貴族のタイトル，タイ人平民男女それぞれに付されたタイトル，華人に付されたタイトル，インド系あるいはマレー系の人々に付されたタイトルなどを判別しながら集計を行うと，多民族都市としてのバンコクの構造が浮かびあがってくる。

2巻から4巻までの全数においてタイ人の占める割合は69.8パーセント，華人の占める割合は26.9パーセントで，これら二つの民族の合計が96.7パーセントに達し，バンコクの人口の大部分を占めることになる。タイ人の割合が7割近いことは，バンコクが華人の町であるという主張を，タイ人中心の方向に向かって修正することを要請する。この点はスターンスタインも強調しており，バンコクは従来外国人観察者によって指摘されてきたほど華人に独占されていたわけではない。華人戸主の下にタイ人の妻が生活する可能性を加えると総人口におけるタイ人の割合はさらに高くなる。

しかしながら，巻別の観察は，このような記述が注意深くなされねばならないことを示唆している。ちなみに，第1巻（王族と官吏）では，全戸主中，華人戸主は0.7パーセントを占めるに過ぎず，これに対して第2巻（道路）においては46.3パーセント，第3巻（集落）においては28.2パーセント，第4巻（水路･運河）においては16.3パーセントを占める。当時のバンコクの中心部ないしもっとも都市的な部分が，「道路」によって代表されるとすれば，そこでの華人の割合が極めて高いことに注意すべきである。行政の中心となる王族や官吏についてはそれがほとんど完全なタイ人の独占的状況にあることが分かっているが，これらは王宮を中心とする地域に集中するものの，それ以外の地域に居住するものも含むとみられる。対岸のトンブリ地区を含めて周辺部に延びていると考えられる「水路・運河」においては，華人の割合は比較的少なくタイ人の割合が高い。このように見ていくと，バンコクという都市の中心部には，王宮を取り囲むタイ人の政治・行政空間と，多くの華人を含むおそらく商業・サービス要素からなる空間とが並置され，その周りに主としてタイ人の居住空間が広がっていたと考えることができる。ただし，後者は決して排他的な空間ではなかった。

## 5．水路・運河沿いの居住者

郵便住所録に記載された戸主の職業および家屋形態は，バンコクという都市（厳密にいえば，ここでは都市という語を使用することは不適当かも知れない。少なくとも市街そのものではない。）の性格ならびに景観を推定するために有用である。これらの記載は個別的で，具体的な記載そのものからバンコクの特性を読み取ることができる側面がある。総合的な分析結果は別の機会に譲って，ここでは都市周辺部とみられる第4巻（水路･運河）に記載された者の生業を概観することを通してバンコクの性格付けを行ってみたい。

第4巻記載者の生業を概観すると，農家あるいは園芸農家などに相当するものが相当数を占めていることが分かる。第4巻記載者総数14,821戸のうち，少なくとも6,661戸（44.9パーセント）がこのカテゴリーに該当する。ここで農家というのは稲作農家を意味すると思われ，2,023戸を数えるが，そのうちタイ人が90.4パーセントを占めている。このほかに園芸農家と総括的に書かれたものが3,617戸を数え，このカテゴリーにおいてもタイ人の割合は90.6パーセントである。また，これらとは別に少なくとも1,205戸（全戸数の8.1パーセント）が農産物の取引に関係して生計を立てている。第4巻記載者の中には農業あるいは農産物に直接関係のない仕事に従事しているものも含まれている。まず，農業以外の生産者あるいは製造業者も散見されそれらの合計は276戸（1.9パーセント）になる。このカテゴリーには，製紙業に従事するもの143戸，書物を作るもの12戸，織物製造に従事するもの29戸，造船（舟）に従事するもの12戸などが含まれている。また，農産物以外の販売に従事するものの合計は715戸（4.8パーセント）で，このカテゴリーには，布地を商うもの189戸，土器を商うもの66戸，屋根葺き材料（アタップ）を扱うもの48戸などが含まれるほか，酒を商うもの143戸，タバコを商うもの33戸，阿片を扱うもの37戸などがある。生業の種類には上記のほかにさまざまなものがあり，それらを詳細に検討することはきわめて興味深いし，各々の生業従事者の民族的構成を分析することにも意義があると思われるがこの作業も別の機会に譲りたい。ここでは，酒を扱うもののうち122戸（85.3パーセント），阿片を扱うもののうち27戸（73.0パーセント）が華人であることを指摘しておきたい。これらに対してタバコを商うもののうち21戸（63.6パーセント），土器を商うもののうち53戸（80.3パーセント）はタイ人であった。

上に述べたような職業別の観察から，水路あるいは運河沿いという立地上の特性を持つバンコク周辺部の居住者が強い農業的色彩を示すことが分かる。この地域の性格は都市ではなく農村そのものである。極端な見方をすれば，バンコクの存在に関係なく自立的に生活を営む地域像がここに見出されるといえるほどに農業的色彩が強い。バンコク郵便住所録がこのような農村的な周辺部を含むことにはどのような意味があるのだろうか。第一の見方は，バンコクという都市が，食料供給地としての周辺農村部を自らの一部とみなしていたという可能性である。そこには城壁に囲まれた，閉ざされたあるいは保護された都市としての性格が見出されない。このような状況がこの時期になって初めて出現したものか，あるいは，伝統的な時代からタイあるいは東南アジアの都市における本質的な性格なのか今後の検討を要するところがある。前者の可能性を取れば，バンコク周辺における道路の建設や運河の開鑿が従来の都市概念を無効にしながら進行しているという解釈を行うことができる。また，後者の可能性を取れば，タイ国における都市は農村部との合同体として捉えられ，アユタヤやスコータイなどの城壁都市のありかたを含めた再検討が必要になる。第二の見方は，郵便住所録においてここに見られたような分類方法をとること自体が，タイ国における都市概念の欠如を示唆するという考え方である。

いずれにしても，郵便住所録がヨーロッパ的な，あるいは近代的な都市概念に沿って作成されて

いないことは重要である。都市概念が城壁内部であった時代が過ぎ去ったとはいえ，住宅の密集をもって都市と見なす考え方もここでは適用できない。現在の日本における「市」のような行政区画的な概念がここで採用されていると主張するには，地域割りないし町割りの作業がまったく行われていないことに注意しなければならない。すなわちこの時期のバンコクは，少なくとも郵便住所録に利用できるだけの組織性を欠いていたと見なされる。

バンコクが小都市であったことを冒頭で述べたが，ここでその人口数を含んで再確認を行うことができる。通常の都市の定義を採用すれば，この時期におけるバンコク人口は，既に述べた160,780人ないし156,505人をはるかに下回ることになる。仮に第4巻に記載された水路・運河沿いの居住者をすべてバンコク市街人口から除き，バンコク市街人口が第2巻および第3巻記載者のみから成り立っていると仮定するならば，その有人家屋数は16,480戸，各戸に平均5人居住するとして総人口は82,400人ということになる。第2巻記載者にも少なくとも676戸の農業従事者（園芸農家を含む）が数えられていることを考慮すると真正のバンコク市街居住者は8万人弱ということになる。しかしながら，このような市街という景観を重視する捉え方は，バンコクという固有の都市像を完全に無視する結果をもたらすのである。スターンスタインはブラッドレイ（Bradley, D.B.）の1870年のバンコク地図を引用しつつ，この地図に示された地域の3分の2にあたる東側の部分が市街地だとすれば，その人口は120,000人であると述べる。これが先に引用したターヴィエルの最終的に依拠した数値なのだが，ここで用いられたバンコク市街（the City of Bangkok）は，家屋密集地という操作的な都市概念ではありえても，如何なる意味においても行政的な地域区分ではないことに注意しておきたい。この時期のバンコクは，行政と商業活動を中心とする中心部から農業従事者の比率が高い周辺部に向かって連続的に推移する境界の曖昧な家屋群であったと考えられる。郵便住所録の配列において，かつての堀や城壁が都市の中心的地域を形成する指標として意識されていないことも重要である。

## 6．道路沿いの都市フロンティア

当時のバンコクは，道路や運河を通じて広大なチャオプラヤーデルタに向かって拡大しつつあったと考えられる。水路および運河沿いの状況については既に述べたように農業的色彩の濃い空間が広がっている。ここでは道路沿いの状況について少し述べよう。昔のバンコクには，街路はあっても道路がなく，いわゆるニューロード（Chareon Krung, the New Road）が，最初の計画道路として1864 年に建設された。ここでは，そのバンコク中心部よりも外側の部分，すなわち外ニューロードを観察対象とする。郵便家屋台帳の作成はこの道路の建設後20年後に行なわれた。この意味でニューロードのバンコクよりの部分（すなわち内ニューロード）が建設後既にある程度の年月を経過していたのに対して，チャオプラヤー河に沿って南に延長された部分である外ニューロードは新開地

としての特性をなお若干保っていたと考えられる。

郵便住所録において外ニューロードの住民として記載されているのは，空家を含めると1,224戸である。有人家屋1,137戸のうち，772戸（67.9パーセント）が華人，249戸（21.9パーセント）がタイ人，64戸（5.7パーセント）がマレー人およびその他のイスラム教徒，52戸（4.6パーセント）がその他の外国人である。名簿に記載された家主の名を調べると，判明する限りではこれらのうち1,016戸が219人によって所有されて賃貸されている。すなわち83パーセントが借家である。5戸以内を所有する零細家主が全家主の76パーセントを占めており，一家主あたりの平均所有数は4.6戸である。家主の中で華人と判定されるのは33人で15パーセントを占めるに過ぎない。これに対してマレー人および他のイスラム教徒の家主は13人（5.9パーセント）で，この地域における住民の割合をやや上回っている。タイ人女性と判定される者は54人で24.7パーセントを占め，タイ人男子は84人で38.3パーセントを占めている。後者のうち55人は王族あるいは貴族の称号を持っており，少なくとも433戸がこのカテゴリーに属するタイ人の所有する借家である。最大の家主はこのカテゴリーに属する Luong Naawaa で，103軒の借家を所有している。ニューロードの借家群が王族および貴族を中心とするタイ人の投資対象であったことが分かる。

この道路沿いに居住する華人の職業構成を調べると，数的に最も多いのが雑貨商（93戸）である。数的に多いものの中には，酒屋（92戸），アヘン商（32戸），賭博場あるいは富籤商（22戸）などが含まれている。タイ人については職業記載を欠くものが多い。判明するものについては職業の種類は基本的に華人と変わらないが，売春宿経営が量的にやや目立っている。医者もまたタイ人に多い。マレー人および他のイスラム教徒は外国領事に属するものが多く，イギリス領事に44人，オランダ領事に16人が所属している。外国の領事館がニューロードに平行して流れるチャオプラヤー河に沿って設置されていることを背景にしている。御者（あるいは車夫）17人を含み，彼らの間では交通関係の仕事に従事する者も多い。

ここで，外ニューロードに立地する家屋を家屋番号順に最初の400戸，中間の400戸，最後の424戸と三つに分割して観察してみよう。最初の400戸がバンコクの中心により近く，最後のグループがもっとも中心から遠い。まず，景観的に建物の形態を観察しよう。家屋の形態は郵便家屋台帳では郵便配達のための目印としても重要な記載事項とされており，レンガ造り，木造平土間式，木造高床式のものなどが屋根葺き材や壁材などに関するさらに詳しい説明を伴っている。これらのうち，完成された都市的な景観の確立に寄与しているのはレンガ造りの家屋であり，木造平土間式の家屋は仮設的な建造物とみなされ，また，木造高床式の家屋は農村的，あるいは一般住居的なイメージを与えるものである。バンコクに近い最初の3分の1においては，レンガ造りの家屋が30.0パーセントを占めている。中間部分でもレンガ造りの家屋は22.0パーセントを占める。これに対して最後のグループでは，レンガ造りの家屋は僅か2.8パーセントとなって，周辺への移行の様子が急激な変化を伴いつつ目に見えるようである。（図1参照）

**図1　レンガ造りの家屋の分布（ニューロード）**

```
----B-----B--B-B-B-B--------------B--BBB-----BB-BB
BBBBB-BBBBB------B-B--BBBBB----B--BB--B-B--BB-B--B
B-B-BBB--B-B-BBB-----------------B-B-B---BB-B-B-B-
--B--B----B-B-B-BBB-B-B-B-B-BB-B-BB-B-B-B-B-B-B---
-BB----B------B-B-BBBBBBBBBB----------------------
--------------------------------------------------
--------------B-----------------------------------
---B-B-----BBBB-BBBBB--BBBBBBBBBBBBB--------------
--------------------------------------------------
--------------------------------------------B-B-B
BBBBB-BBBBB-B-B-B---B----------------B----B-------
--------B-B-B-B-BBBBBBBBBBBB-BB------------------B
B-BB--------------------------------------------
---B-BB-----------------------------------------
---B-B-BBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBB--B-BBB-B--B-B-B-
B--B-B--BB----------------------------------BB-B-
--B----------------------------B-B----B-----------
-----------------------------------B--B-B----------
--------------------------------------------------
---B-BBB-----------------B------------------------
--------------------------------------------------
--------------------------------------------------
--------------------------------------------------
--------------------------------------------------
------------------------
```

B：レンガ造りの家屋　　—：その他の家屋

**図2　民族別にみた戸主（家屋配列順，ニューロード）**

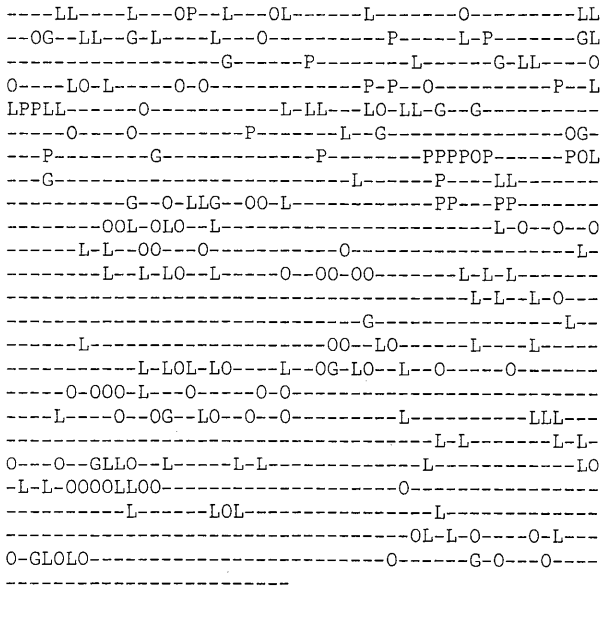
```
TTOtCCXTtCCCCtCCMCCCCCCCCMMCCCCCTCCCCtCCTCCtTTCCCC
CCCCCCCCCCCCCTTCTCCCCCXCCCCCMCCXTCCtCTCCCCtCCTTCCC
CXtCTCCCCCCCTCXCCCCXCXtXCTCTCCXCCCCCCCCtCCCCCCCCCC
CCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCTCCCCXCTCTCCCCCCXCCCTCTCCCT
CTCCCMCCMCXCC?XCCXCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCMCCCCCCCCCT
CXX?CCCCCCCXXCCCCCXTTCCMTCCXCCCCCCCCCCCCCCCCXCCCCC
CCCtCCCCCCCCCCCMCCCCCCCCCTCCCCCCCttTTCCtCtCCCMtCC
MMCCTTTCTCCCXTTXtTttCttCCMXXXCTOOCTTtTCCttCTCttttC
CXCCTXXXCXCCCCCtCCCCCCCCCCTCXXXXCCtttCCCCtXCXMCCt
TMMMMCMtCCCCCCCCCCCtCCCtCCCCTCCCCtCCCXXCCCCCCCCCXC
CCtXTXCTCCCCCXCXCCXTCCMCCXCXCCCCCCMXCTCCtTTXTMTTCC
CTTCCCCCCTCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCTXTXXXMCXCMCMtOTCCM
TOMMOCCCXTCCXXXXCCtCttCTtCTXCCCTtCXXtTCCCCTCCCCCC
tCCXOOOOOOMTMMCOOOtTOtTOOtXOCCCOtTMOCtOtOtOCtttCtC
TCCCtTCCOCtCOOOMOCOMCCCCOCCCCCMCCCCCCCCCMCXXCtMtCC
CMCTtCCCCCCCMCCCCtCCCtCCCmCCtCCCCCCCCCCCCCCCTttCCC
CCCCCCCCCCCCCCtCCCTCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCMCMCC
CCCCCXCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCXCtCCCCCCCCCTT
tTTCTtOTOOTOOOOTXCTTOTTCXTTtttCtXXCCCTCtXCtTCXCXMC
CCCCCCCCCCCCCCCtCCTCCCCtTCCCCCCCtCCCCCCCtXXXMCXCCC
CCCCXCCCCCCCCCCXtCCCCCCCMCCCXXMCCCCMCCCCtCMCMCTTCTT
XCtCtCCtCCCCCCMCCTCCCCCCCXXCCXCXCCCMCCCMXMXtTtCttT
TTTCTTTTTTtTOOtTCCTtXtttCTCCTttTCCCC?CCCtCCXCCCTCt
CCtCCCtCCCtTTOCCCCOTCTtttXTMCCCCCCCCCTCCCCCCCCCCtC
OOTMttMMMMTMTMtTTTtTTtTC
```

T：タイ人男性　　t：タイ人女性　　C：華人
M：マレー人およびその他のイスラム教徒　　0：その他

これら三つの区域の居住者を民族別に観察すると図２のようになる。最初の３分の１においては，華人が71.0パーセントを占め，この道路がバンコク市街地に形成された華人地区の延長であることを示唆している。中間部および末端部では華人の割合はそれぞれ57.3パーセント，61.1パーセントになる。マレー人あるいはインド系イスラム教徒は，最初のグループでは2.8パーセントに過ぎないが，中間部では6.5パーセントとなり，末端部で5.0パーセントと再び僅かながら減少する。これに対して，タイ人の割合は，最初のグループにおける17.8パーセントから中間の18.3パーセントを経て，末端の23.6パーセントへと次第に増加している。すなわち，周辺に行くにしたがってタイ人の参与が顕著になっていることが分かる。ただし，いずれの場所においても華人の排他的な居住状況は見られず，それぞれの民族は近隣関係においていくらかの凝集性を示しつつも，ニューロード自体はそれぞれの民族が混住的な状況を保っている。とはいうものの，外ニューロードにおける華人の割合はバンコク全体に比して際立って高く，華人が都市フロンティアの主役であったことは明らかである。

都市フロンティアとしてのニューロードは，そこに都市の延長部分として歓楽的な機能を多分に内蔵しながら発展していった。すなわち，そこでは酒屋，アヘン商，売春宿，賭博場，富籤屋などが総戸数の18.4パーセントを占めている。これらのいわば悪徳の商いを生業とするものは，図３に

**図３　酒屋，阿片商，売春宿，賭博場・富籤屋の分布（家屋配列順，ニューロード）**




L：酒屋　　0：阿片商（阿片窟）　　P：売春宿　　G：賭博場・富籤屋

示すように市街に近い部分と周辺とでその分布においていくらかの違いを見せている。酒屋については，それぞれのグループに34戸，32戸，31戸があり，周辺部に向かうにしたがって僅かに減少するものの全体的に均等な分布が見られる。アヘン商については，それぞれ18戸，36戸，33戸という分布が見られて町に近い部分に少なく中ほど以降に多いという構造がある。これに対して売春宿や賭博場などはバンコク市街に近い部分に集中している。ちなみに売春宿はそれぞれの地区に19戸，4戸，0戸，賭博場と富籤屋は11戸，3戸，4戸というように分布している。人が集まりやすい距離に売春宿，賭博場などが立地し，より特殊な嗜好性をもつ阿片窟が市街中心部からより離れて立地していることに注意したい。

外ニューロード居住者について，少し立ち入った観察をすると以上のようになる。バンコク周辺に建設された新しい道路が，タイ人王族・貴族を中心とする都市住民の投資対象となり，とくに歓楽という目的に焦点を合わせながら，借家で商いを営む華人を中心にして，開発されていったことが分かると同時に，そこが，近くの川沿いに立地する外国領事館などに雇われたマレー人などの居住の場としても利用されて，混然とした姿を呈していることが理解できる。そしてそれは周辺に行くにつれて次第にタイ人の比率を増して行くのである。

ここで，バンコクにおける他の道路などと比較しながら外ニューロードにおける華人の居住状況を位置付けておこう。バンコクの中心により近く位置し，ニューロードに連結するサンペン(Sampheng) 地区は，バンコクにおける華人居住地区で，現在でも中国語が飛び交う地域である。郵便住所録においては，華人は92.9パーセント（519戸中482戸）を占め，ほとんど排他的な居住地を形成していることが分かる。東南アジアにおける伝統的な外国人の居住はこのような民族別のコミュニティ形成をともなったものと想定されるが，その姿がここにも認められるのである。王宮からバンコク旧市街の中央を東へ向かうバムルンムアン（Bumrung Muang）通りはニューロードとほぼ同じ時期に開かれたとみなされるが，郵便住所録では華人の割合が56.8パーセント（354戸中201戸）となっている。ここでも華人の割合がもっとも大きいが，それはサンペンにみられるような排他的な様相を示さず，この意味でニューロードと共通する側面を有している。これらのことからバンコクの都市フロンティアにおける多民族混住的な性格と，その中での華人の役割の突出を指摘することができよう。

## 7．おわりに

中国やインドさらにはヨーロッパと異なり，東南アジアが大きな人口の居住する空間としての都市を伝統的に持たなかったことを，筆者は別に機会にしばしが指摘してきた。(坪内 1986)。19世紀も終わりに近づくとこの地域でも都市が急激に発達してくる。ヨーロッパでは城壁の中で活動が行われた時代から産業革命にともなう新しい都市の時代に移るとき，それまでの都市の概念では処

理できないような無秩序ないし混沌が生じた。しかしながら，ヨーロッパにおける都市の伝統はそれに対処する方法をより迅速に準備したといえる。東南アジアにおいても，とくにシンガポールやバタヴィアあるいはサイゴンなどの植民都市は，ヨーロッパ的な手法をある程度取り入れることが容易であった。これに対して，東南アジアとくに植民地主義の影響の少ないバンコクでは，伝統的な城壁都市がその外部に対して拡張するとき，ヨーロッパとは異なった様相を呈したのではないか。それは中心部の小ささゆえに無秩序の度合いの大きさをもたらしたのではないか。東洋のベニスと呼ばれるだけの水路の活用が，熱帯的な建築のありかたと呼応しつつ異なった様相を招いたのではないか。そのことが，一方では農業的な部分との接続，他方では都市の無秩序の外延への放射状拡散を顕著にしているのではないか。多民族混住はその一つの現象ではないか。バンコクの例はこのような仮説を，提出し検証する場として有用なように思われる。住民名簿に基づくいわば記述的・機械的な観察とあわせて，このような事態に都市行政機関がどのように対処していったかにも注意を払う必要がある。この種の研究が，今日のアジア的都市の出現を説明するためにどのような有効性を提示できるかもひとつの課題である。

（甲南女子大学文学部教授）

## 参 考 文 献

Crawfurd, John. *Journal of an Embassy from the Governor-General of India to the Courts of Siam and Cochin-China*. 2nd ed. London: Henry Colburn and Richard Bentley. 1830

Malcom, The Rev. Howard. *Travels in South-Eastern Asia, Embracing Hindustan, Malaya, Siam, and China, with Notices of Numerous Missionary Stations, and a Full Account of the Burman Empire*. 2 Vol. London: Charles Tilt. 1839

Porphant Ouyyanont and Tsubouchi, Yoshihiro. *The Bangkok Postal Census and Nineteenth Century Bangkok Economic History*, Vol. 1 & Vol. 2. ASAFAS Special Paper, No.5 & No. 7. 2000.

Porphant Ouyyanont and Tsubouchi, Yoshihiro. Aspects of the Place and Role of the Chinese in Late Nineteenth Century Bangkok. *Southeast Asian Studies* 39(3), Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University.

Skinner, G. William. 1957. *Chinese Society in Thailand: An Analytical History*. Ithaca: Cornell University Press.

Sternstein, Larry. Krung Thep at One Hundred: Scape and Grid. *Journal of the Siam Society* 67(2). 1979.

Sternstein, Larry. City of Magnificent Distances. In J.N. Jennings and G.J.R. Linge (eds.) *Of Time and Place: Essays in Honour of O.H.K. Spate*. Canberra: Australian University Press. 1980.

Sternstein, Larry. *Portrait of Bangkok*. Bangkok Metropolitan Administration. 1982

Terwiel, B.J. *Through Travellers' Eyes: An Approach to Early Nineteenth-century Thai History*. Bangkok: Editions Duang Kamol. 1989

Tomlin, Jacob. *Missionary Journals and Letters, Written during Eleven Years Residence and Travels among the Chinese, Javanese, Khassians, and Other Eastern Nations*. London: J. Nisbet. 1844.

Tomosugi, Takashi. *Reminiscences of Old Bangkok: Memory and the Identification of a Changing Society*. Tokyo: The University of Tokyo Press. 1993

Tsubouchi, Yoshihiro. A Sketch of the New Road in 1883, In Kenji Tsuchiya (ed.) *"States" in Southeast Asia: From "Tradition" to "Modernity"*. Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University. 1984.

坪内良博 『東南アジア人口民族誌』勁草書房 1986

坪内良博・石井米雄 「郵便家屋台帳からみた19世紀末のバンコク人口」『東南アジア研究』20 (2) 1982